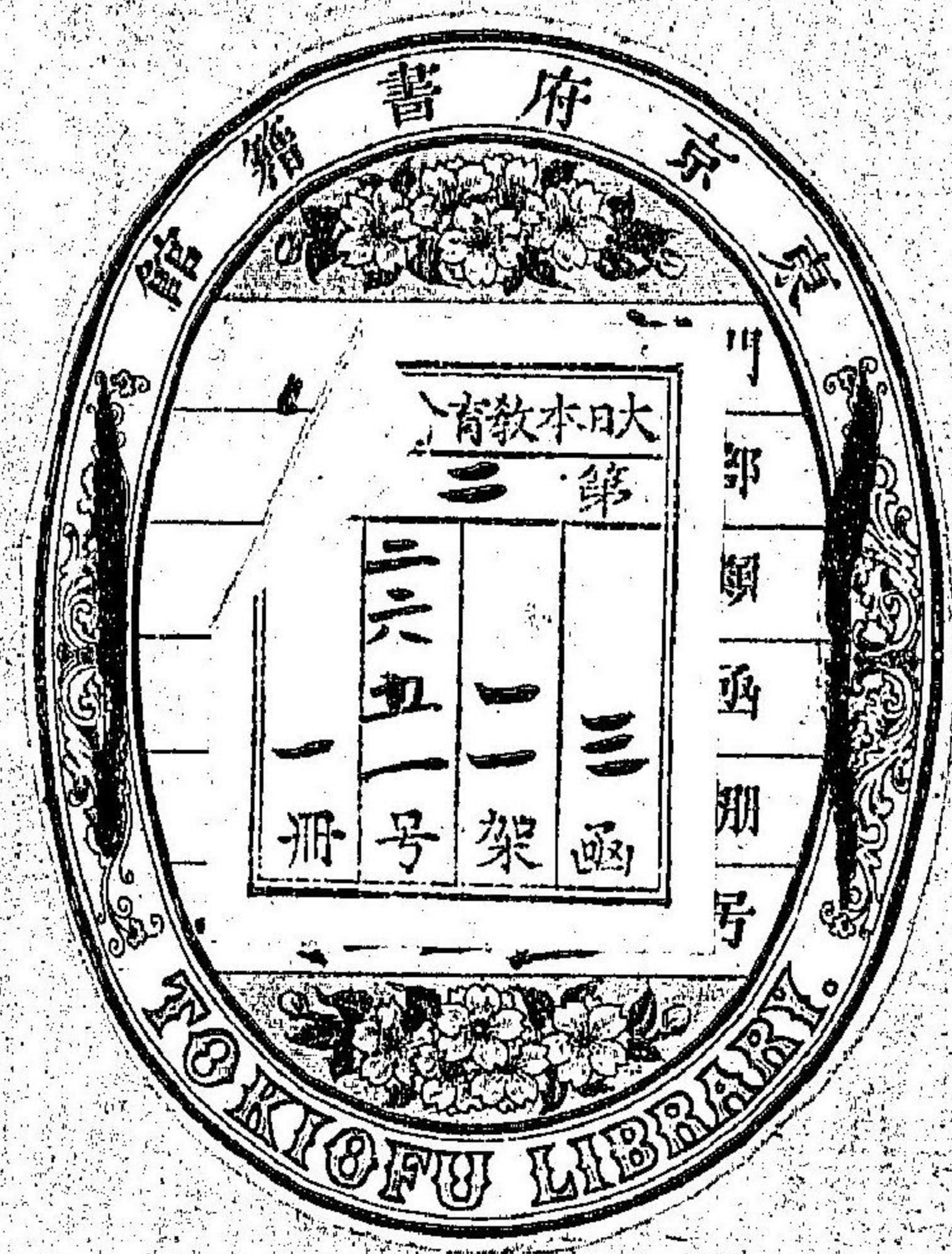


松井惟利
録
單語篇諺解

全



特34

900

三
一
本

077956-000-2

特34-900

單語篇諺解

松井 惟利/編

M8. 12

DAC-1436



櫻井先生閱

定價二拾錢

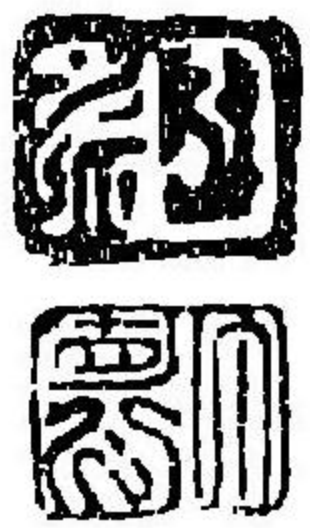
單語篇語解

編輯藏版人 松井惟利



為句連

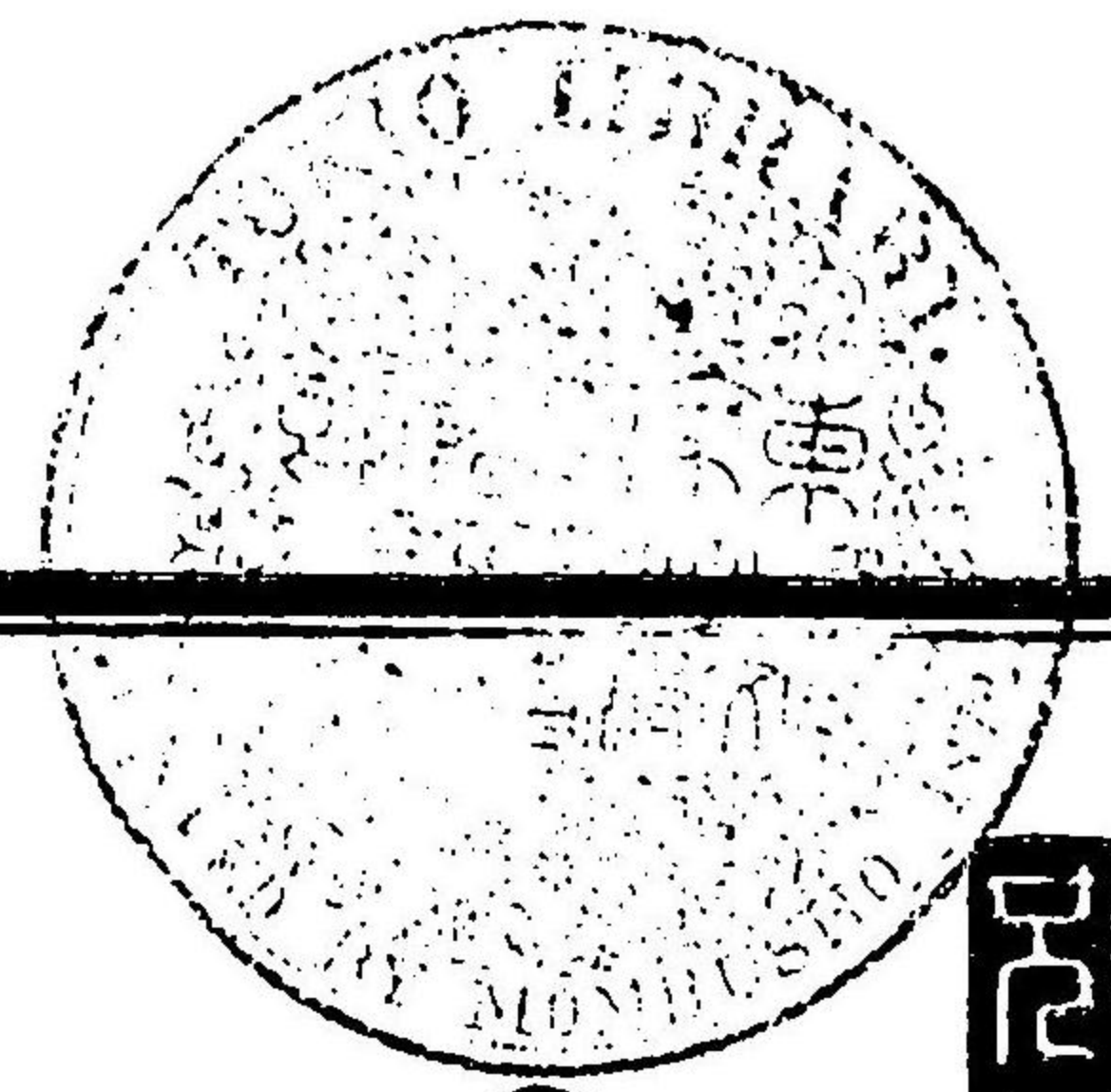
櫻井善友書



櫻井元三

單語篇註解

編輯 松井惟利



東京大学
言語学
部

為句集

明治三十四年
三月
東京
出版

櫻井元三



單語彙解



竹葉

小公園或反

單語彙解



小公園或反

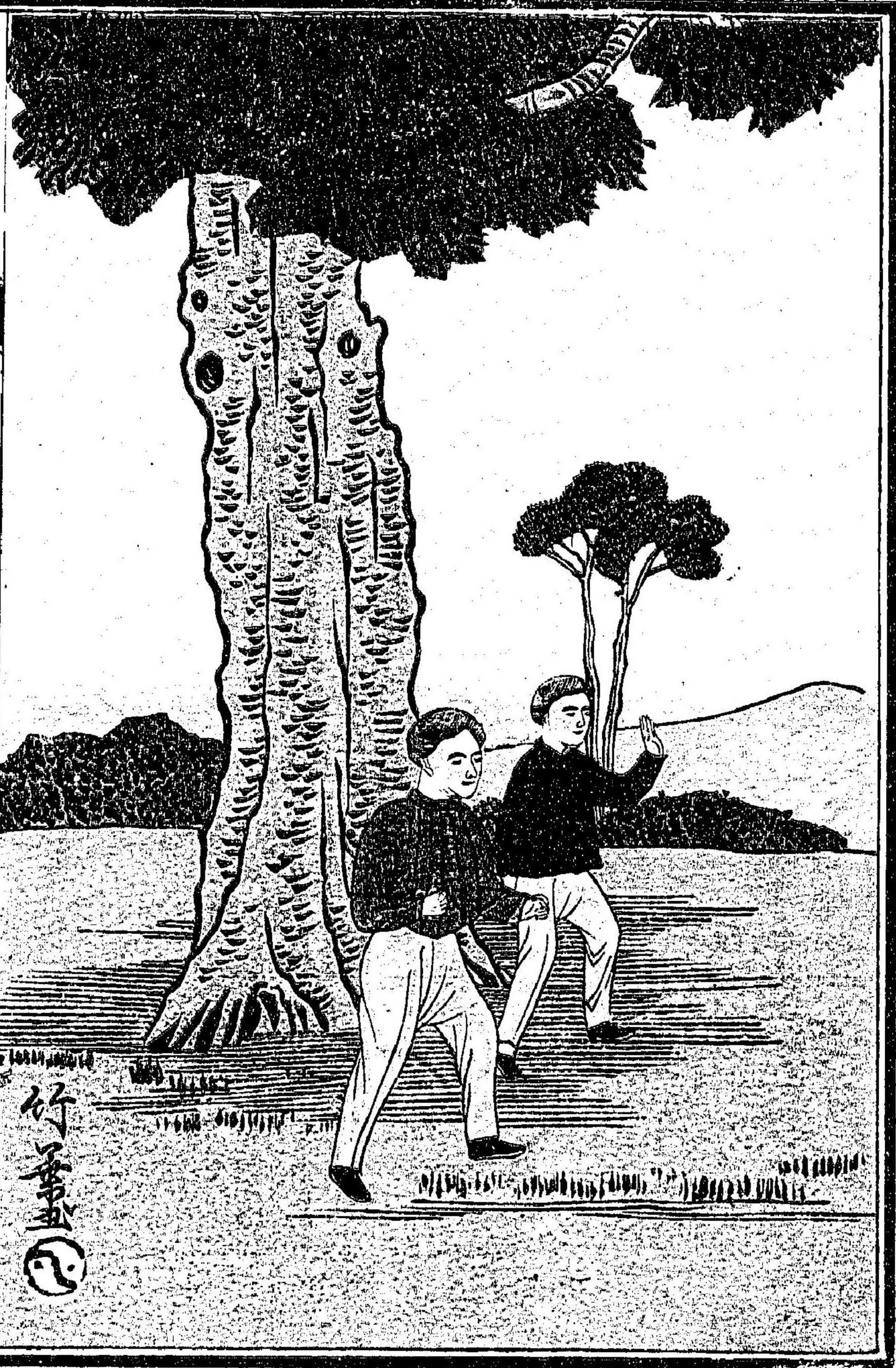
單語彙解



小公園遊覽

單語彙解

小公園遊覽



竹葉

松井惟利 輯 録 單語篇 譯解

數 此印の下へ記したるもの西洋の數字あり又・

0 〇 〇の形に記すものあり即ち百〇〇の様に十の代り〇を置き置き

一 一の形に記すものあり即ち富士山の日本一の山ありといふ如く・I.I.

二 二の形に記すものあり即ち二と一をよきたる數なりといふものあり・2.II.

三 三の形に記すものあり即ち三より多く六より少き數なり手の指と同數なりといふものあり・3.III.

四 四の形に記すものあり即ち四より多く六より少き數なり手の指と同數なりといふものあり・4.IV.

五 五の形に記すものあり即ち五より多く六より少き數なり手の指と同數なりといふものあり・5.V.

六 六の形に記すものあり即ち六より多く七より少き數なり手の指と同數なりといふものあり・6.VI.

七 七の形に記すものあり即ち七より多く八より少き數なり手の指と同數なりといふものあり・7.VII.

八 八の形に記すものあり即ち八より多く九より少き數なり手の指と同數なりといふものあり・8.VIII.

九 九の形に記すものあり即ち九より多く十より少き數なり手の指と同數なりといふものあり・9.IX.

十 十の形に記すものあり即ち十より多く十一より少き數なり手の指と同數なりといふものあり・10.X.

百 百の形に記すものあり即ち百より多く千より少き數なり手の指と同數なりといふものあり・100.

千 千の形に記すものあり即ち千より多く万より少き數なり手の指と同數なりといふものあり・1000.

十萬 十萬の形に記すものあり即ち十萬より多く十萬萬より少き數なり手の指と同數なりといふものあり・100,000.

十億 十億の形に記すものあり即ち十億より多く十億億より少き數なり手の指と同數なりといふものあり・10,000,000,000.

千億 千億の形に記すものあり即ち千億より多く千億億より少き數なり手の指と同數なりといふものあり・1,000,000,000,000.

度數 長さ短き廣さ狭さ及び高さ 低さなど設計の名あり

寸 一寸を十ふ分けると一分といひます

尺 一尺を十寄せると一丈といひます

分 一寸を十ふ分けると其一分といひます

尺 一寸を十ふ分けると一尺といひます

釐 一分を十よ割りその二厘なり

毛 一厘を十よ割りその一毛なり

里 三十六町と一里なり

町 六十間と一町なり

間 六尺を一間なり

量數 五穀流動物等の多き
少きを計る名あり

斛 十斗と一斛なり

斗 一斛を十よ割りその一斗なり

升 一斗を十よ割りその一升なり

合 一升を十よ割りその一合なり

勺 一合を十よ割りその一勺なり

抄 一勺を十よ割りその一抄なり

撮 一抄を十よ割りその一撮なり

圭 一撮を十よ割りその一圭なり

衡數 物の輕さ重さを計る名あり

貫 一匁を十で百匁より百目と十で一貫目なり

匁 一分を十寄せれば一匁なり

分 一匁を十よ割りその一分なり

釐 一分を十よ割りその一釐なり

斤 百六十匁と一斤と云ひまた西洋のものあり

兩 一種々ありども通例四匁五分の目方と一兩なり

貨數 金銀を計る名あり

圓 百錢で一圓なり

錢 十厘で一錢なり

半錢 一錢を半分なり

釐 一錢を十よ割りその一釐なり

歷數 天地及び象眼を計る名あり

度

地球の周圍を三百六十に割る其一分を一度といひます

分

一度を六十に割るものと一分といひます

秒

一分を六十に割るものと一秒といひます

時數

ハ時や日を計るあり

日

二十四時と一日といひます

時

六十分時と一時と申す

分

時を六十に割るものと一分時といひます

秒

一分を六十に割るものと一秒時といひます

田數

ハ地積の大小を計る名あり

町

十段と二町と云ひます坪數よまれば三千坪より多し

段

十畝で一段より多し此坪數ハ三百坪より多し

畝

一段と十より少しものと一畝といひます坪數よまれば三十坪より多し

歩

ハ一間四方より多し又二坪といひます

方

天地間のちやぶ物の方向を云ふあり

東

日の昇ると見ゆる方を東といひます

西

日の没ると見ゆる方が西といひます

南

東へ向つて右の手の方が南といひます

北

東へ向つて左の手の方が北といひます

乾

ハ西と北の間であり

坤

ハ南と西の間であり

巽

ハ東と南の間であり

艮

ハ北と東の間であり

上

何品でも空の方へ向つて上といひます

下

何品でも地ふけの方を下といひます

左

東へ向つて左の方を左といひます

右

東へ向つて右の方を右といひます

前

人ふたてて云ハ顔や腹の方を前といひます

後

人ふたてて云ハ背の方を後といひます

中 一又ちのちのち五才の所と中と云ふ

端 物の盡る所と端と云ひまは

形 ハ諸物品の有様即ち模様を云ふなり

角 縦線と横線の端と出合と所と云ひまは

丸 ハ手球の形の中なるものを云ひまは

三角 三の直線と出来て三つの角と云ひまは

菱 四角の物と云ふと云ふと云ふ形と菱形と云ひまは之を草の實の形と云ひまは

長 間のちのちと名かまのつと云ふと云ひまは

短 物の丈の長と云ふと云ひまは

高 上へ見上げる様子の高と云ひまは

低 下へ見おろす様子の低と云ひまは

曲 真直であつたものを曲ると云ひまは

直 少し曲りあつたものを直ると云ひまは

薄 物の厚なることを薄と云ひまは

厚 物の薄くさがることを厚と云ひまは

縦 樹よたてて云へば幹と縦と云ひまは枝と横と云ひまは

横 縦と反して所と横と云ひまは故に枝道と横丁と云ひまは奥の側面と横顔と云ひまは

廣 かつたところ開けゆる所と廣と云ひまは

狭 ちうとつたところと狭と云ひまは

太 細いところを對しての詞を細くあつたものと太と云ひまは

細 太くあつたものを細くと云ひまは

尖 錐の先のちうとつた所と尖ると云ひまは

楕圓 圓いもの少し長きものを丁度小判の形の中なるものを云ひまは

色 ハ濃薄善悪と云ふ人々の眼目と以て治定まことと云ふあり

青 雲のちのちの空の色と青と云ひまは

黄 ハ金のちうとつた色と云ひまは

黒 石炭の墨のちうとつた色と黒と云ひまは

白 雪のちうとつた色と白と云ひまは

赤 血の色や朱の色のちうとつた色と赤と云ひまは

紫 緋と藍と交ると紫と云ひまは

緑 青色のことと緑と云ひまゝ
○大陽七色の一

萌黄 黄と藍と交へば萌黄の多りまゝ

茶色 赤と黄と鼠と交へば茶色が出来まゝ

濃青 紺より薄く浅黄より濃き色の濃
青よりひまゝの大陽七色の一

紺 藍と紫と交へば紺が出来まゝ
○大陽七色の一又紫色と云ひまゝ

鶯色 赤と黄と黒とを少し交へば鶯色
の多りまゝ

藕合 紫と白と交へば藤色が出来まゝ

鶯茶 紺と櫻と交へば鶯茶の多りまゝ

鼠色 黒と白と交へば鼠色の多りまゝ

花色 藍色と云ひまゝ

柿色 赤と黒と交へば柿色が出来まゝ

浅青 浅黄より濃き色と浅青のひまゝ
○大陽七色の一

浅黄 藍と白と交へば浅黄の多りまゝ

桃色 紅花や櫻燕紙へ白と交へば桃色
の多りまゝ

樺色 黄色と赤と交へば樺色が出来まゝ

海老色 紫色と樺色と交へば海老色の
多りまゝ

紅 紅の花や茜や程燕紙や洋紅の多り色と
云ひまゝ

鶯色 萌黄と鼠と交へば鶯色の多りまゝ

飴色 黄と赤と交へば飴色の多りまゝ

橙色 黄と少し赤と入ると橙色が出来
まゝ

天文 日月星辰雨露霜雪
等のことと總て云ひまゝ

日 光りと熱と萬物の興へるものなり
まゝ

星 空の數多く光り輝き居る体と總て星
と云ひまゝ

雨 雲冷て水とあり地より降る是と雨の
多りまゝ

鶯色 赤と白と交へば鶯色が出来まゝ

朽葉色 黄と赤と鼠と交へば朽葉色の
出来まゝ

生壁色 紫と緑と交へば生壁色の多り
まゝ

猪肝色 薄さ茶へ鼠と交へば猪肝色の
出来まゝ

月 日の光りと多き輝き一年に十二度地球
の廻りを繞りまゝ

風 空気の流動でろろり又熱と受まば空気
軽くなり上へ揚り其跡へ他の空気が流れ
来るを風と云ひまゝ

雷 電をつつと響きやて電気の発動と
依る出来まゝ

電 電気発動して雲より雲に至りて火を發せしる是と稱光と云ひま

霧 寒きの為水気の地の上下に直に雲のやうなものがあつて霧と云ひま

霜 華氏の寒暖計二十度より以下の寒きよりあつて露の凍のでつたもの

氷 水の寒きの為凍りたるもの水と云ひま

火 通例石と金と摩擦して取るものやうな又空氣がゆきと燃あつたものであつた

南極 地球の南の端と南極と云ひま

日蝕 地球と太陽の間へ月が繞り来て太陽の光華とさふさふと日蝕と云ひま

暈 空の冷て氷を所へ日月の光りのうつるもの

雲 水気の昇り集りて凝りたるもの

露 水蒸気の蒸騰夜の冷気よあひ木の葉等よあつて露と云ひま

雪 水蒸気の寒きの為固り花の形よあつて地に降るものと雪と云ひま

霰 雨の空中より水りて粒となり地に降ると霰と申す

煙 燃るものより立昇る所の蒸発気と云ひま

北極 地球の北の端と北極と云ひま

月蝕 日と月の間へ地球が繞り来ると月蝕と云ひま

虹 雨氣日光よ及照して出来るもの

雹 雨の氷りより其大なるものよ田畑を荒らす

晴 少しも雲あつた空を晴天と云ひま

陰 物あつた太陽の光華とさふさふと所と陰と云ひま

霖 三日以上より幾日少く降る雨と霖と云ひま

時令 春夏秋冬及び昼夜寒暑等を總と時令と云ひま

春 植物の成長する季候と春と云ひま又北半球よ三四月と春と云ひま

秋 年の第三の季候と九十月の三ヶ月と秋と云ひま

閏 三百六十五日五分五厘より地球と太陽と一週を又一年と三百六十五日より故に四年目より五分五厘を四餘と日と多故に其年の二月より置て此年と閏年と云ひま

霽 雨と雪と交つて降るものと云ひま

曇 雲が出で太陽の光華を覆ふ空を曇天と云ひま

日向 太陽の光華の二つよ照せり日向と云ひま

夕立 晴空の急な雲立て降り出る雨を夕立と云ひま

夏 六七八月の三ヶ月を夏と云ひま又日が真直に輝く尤も暑き季候と云ひま

冬 寒い季候と冬と云ひま又北半球よ四ヶ月より十二月の一日より三月の一日迄と冬と云ひま

曉 今よ夜の明けやうと云ふ時と曉と云ひま

單 吾 彦 彦 屏

公園歳友

朝 夜より晝より所の時を云ひます

晝 日の出より日の没る迄の間を晝といひます

一昨日 今日が三日あるに一日をさして二昨日といひます

今日 今夜の明けの日を今日といひます

明後日 今日が一日あるに三日のことを明後日といひます

寒 地球が太陽の遠くを繞る時節を寒といひます

涼 暑のさへおちた時を涼といひます

正午 日の其地の最頂点を當りし時を正午といひます

夕 晝より夜に移る時をいひます

夜 日没後より日の出る迄の間を夜といひます

昨日 今日が三日あるに二日をさして昨日といひます

明日 今日が一日あるに二日のことを明日といひます

暑 地球が太陽の近くを繞る時節を暑といひます

暖 寒よりもよく暑くぬくぬくの程の時節をいひます

冷 段々寒くある時を冷氣といひます

黄昏 日の没る跡の未だ薄明な時を黄昏といひます

四季 地球の繞る道は楕圓形故に日の光り方が地球へ斜に照らすと四季の射す光り方が異なる時節が出来ます

前月 過ぎ去りし月を云ひます 例今が當月が二月あるに一月のことをいひます

地理 海山村里田畑等の類を地理といふ

水 酸素と水素より出来たものをいひます

國 大洲或は大島を幾つに分け其下を各一國といひます

府 人々の集る所を府といひます

山 土石などの多く集りて平地より高く多なるものをいひます

峯 山の尖りたる所を峯といひます

本月 現在の月を云ひます 即ち當月と同じ

下月 未だ来らざる月を云ひます 例今が當月が二月あるに三月のことをいひます

土 水の集りたる草木を生ずるものをいひます

郡 國を幾つに分け其下を各一郡といひます

縣 田舎にて人々の多く集る所を縣といひます

谷 山嶺と嶺との間の卑き地をいひます

坂 向ふ上りの地を坂といひます

嶺 凸凹ある山道と峠と云ひま

川 湖水又山の間をさう出で海へ入る水と川と云ひま

澤 地低く一と濕り水草をの生ゆる所と澤と云ひま

堤 土を築く水と過むる所と堤と云ひま

溝 悪水を去る為と地と細く穿ちたる所の溝と云ひま

瀧 山や高い所より低い地へ急に落ちる水と瀧と云ひま

島 四方より水にて取巻たる小き陸地と島と云ひま
又四方大陸よりつきたる半島と云ひま

濱 陸土の海より長く沿たる水際の地と濱と云ひま

海 大洋より分きて陸より近つたる所と云ひま

港 船の碇泊する所都合よく又其川岸に荷を運ぶ都合よく人の多く集る所と港と云ひま

池 地と穿ちたる水を集めたる所と池と云ひま

橋 木又石を川の上へ架し通行の便利を能くする所の橋と云ひま

堀 溝より中廣く且深く地を穿ちたる所の堀と云ひま又船を導く所と云ひま

波 海川の水風の為より高低をなすと波と云ひま

浦 曲りたる風よ船の隠る所と浦と云ひま

村 一郡と幾つもの割と下分と村と云ひま

里 八村の中より家の幾軒も揃たる所と云ひま

町 商人の多く集る住む所と町と云ひま

圃 野菜ののを作る所と圃と云ひま

林 樹木の多く生たる平地と林と云ひま

野 草の満たる平地と野と云ひま

井 地を穿ち底のちぬ桶をいせよ土の用れる所と云ひま
常水と求むる所の穴と云ひま

湖 四方を全く陸土より圍み其中に水の溜りたる所と湖と云ひま

沼 池の類より大なるを沼と云ひま

市 人々の諸方より集る諸物を商賣する所と云ひま

田 稻を作る所と田と云ひま

森 林より多く樹木の繁茂たる所と森と云ひま

岡 常より小高き所を岡と云ひ海川より對して陸地と岡と云ひま

道 へ總て人々の往来する所の總名と云ひま

泉 土の中より湧き出る水と泉と云ひま

麓 山の裾と麓と云ひま

岸 海川と陸土の高き界と岸と云ひま

甲 海に突出たる平地をいひます

畔 田の界をいひます

洲 水中の小高き所を洲といひます

瀉 海辺の平地を瀉といひます

石 土や礦物の凝集したる所をいひます

泥 水と土と混合したるものをいひます

小路 街道より分たれる枝道と小路といひます

水柵 木竹と排て水を障るものと水柵といひます

曝 田の中の廣き道を曝といひます

津 水の會する所をいひます

潮 日月の引力で一日二度満ちてくるものをいひます

巖 石の粗く尤も大なるものを岩といひます

砂 石のまじり細くものを砂といひます

樋口 水が水と溜り又水と流る所の自在に出来る様子を造るものをいひます

街道 公道と同トをいひます

浮標 海の浅い深いと知らるる為のものをいひます

入江 海水の陸地へ入り込む所をいひます

開墾地 草木瓦石等の多かる地を切り開く所を開墾地といひます

居處 宮殿樓閣家等と總て居處といひます

宮 天子の家と宮といひます

樓 高く上へ組上る所をいひます

廳 訴訟を取まぐ所を廳といひます

邸 人々の持分がみの地と邸といひます

店 品物と總て商人家の前面を店といひます

暗礁 水面より見えざる海中の岩を暗礁といひます

鐵道 土中へ横に材木を並べ其上へ蒸氣車の輪の這入る鐵の棒を二本並べたものをいひます

殿 高貴の人の家と殿といひます

城 堅固な築て敵を防ぐ所を城といひます

驛 宿場のことをいひます

宅 人々の寒暑又雨露を凌ぐ為の隠れ所をいひます

倉 米穀を貯る土藏を倉といひます

廐 馬を飼へ置く所を廐と云ひます

戸 木より板を造り之を板と張りて門口等と建るものをいひます

社 神と尊と祭るとる家を社といひます

棟 棟ハ梁の上よりつと家根の形を造る木でありませ

柱 材と四角より造り家の四方及び入口の左右に建るものを柱と云ひます

瓦 瓦ハ埴と粘つて形を作り竈へ入ると松の枝を焼き屋根と葺くものをいひます

垣 竹を割てこれを押縁へ編みつ内外の見えまうざりやう造りたるものをいひます

窓 空を透し又太陽の光を取り取る為の家都合より所より穴をいひます

門 邸前へ建て出入を掌るとのものをいひます

庭 草木等と植たる家の前の所を庭といひます

寺 佛像を安置し又僧尼の居る所を寺といひます

梁 棟よりなる為は横より渡する木を梁といひます

椽 棟より下へ斜より取付たる小き角材と棟と云ひます

壁 細く竹を割て編み其上へ泥を塗り風雨を禦ぎ又家の間の隔となるものをいひます

屏 柱と建つて貫を以て通し外面より板を張りて地の所をいひます

天井 屋根の裏の見えざる様を張りたる板をいひます

敷居 木へ溝を穿ち戸障子とさるものより下より敷居といひます

障子 木より縁を造り中へ格子と組と糸紙を張り敷居障子の間を風を防ぐものをいひます

廡 家根の先へ又家根と出たる板敷をいひます

屋根 薄き板と葺き或は瓦と葺き雪と雨露霜雪と凌ぐものをいひます

戸棚 家の中より造り中へ棚と架し諸物を入れ置く所をいひます

土藏 丈夫なる家の如く造り壁と厚くつひ合せ秋く火災を防ぐものをいひます

湯殿 身体を洗ひ清むる所を湯殿と云ひます

馬立 門前又門外等に馬を繋ぎ置く所を馬立といひます

鴨柄 敷居より深く溝を穿ち敷居の末へ取りつた戸障子とさるものをいひます

簷 家根の終らんとする所を簷といひます

椽 家の前の廡の下の板敷と椽といひます

臺 四方の能く見える高き所を臺といひます

廊下 此家より彼の家へ行く為の道なる所を廊下といひます

穴藏 地を深く穿ち廻り木或は石より堅固めし入口より火災を防ぐものをいひます

厠 八雲隠して穢れ所を触れ清潔なることを注意せしめたる所をいひます

牢獄 官の板より背きたる人々を捕へんと置く格子造りの家をいひます

長家 人々の集り住居する長き棟の家を長屋といひます

平家 二階の家の家を平家といひます

二階 平家の上より又家のつらつらと三階といひます

襖 木で骨組を造り両面より厚く紙を張り縁をうち中へ馬をたたく家の中の仕切をいひます戸棚の前へ敷くものであります

煉化石 八塩と灰を雜て練り電入を焼き家と造るものであります

桁 八柱の上より乗て梁をさするもので桁といひます

桁 八柱より横へ出て廊や廊下の桁といひます

敷石 庭や入口へ幾つも並べて往來の便利にする為の石であります

欄干 二階又は縁廊下をさう外へ落ぬ為の横へ渡したる手すりをいひます

隔子 窓さへ内外の見えざる様いふ木又は竹を横木を渡したるものを格子といひます

羽目板 壁さへ崩れ易き所と板を張りたるの羽目といひます

煙筒 鉄葉又は陶器にて造り竈の腹へつけ煙を外へ出さるのものをいひます

人倫 男女父子及び農工商等と總て人倫といひます

天子 一大洲一大國中に於てごん位の貴き天子といひます

華族 士族の上より居ると華族といひます

士 華族に次ぐ所の人といひます

卒 士に次ぐ所の人といひます

君 高位ある人といひます

民 農工商と云ふ民といひます

男 鳥類より雄といひ獸類より牡といひふ對して男といひます

女 鳥類より雌といひ獸類より牝といひふ向ひて女といひます

夫 男女を配偶するて夫婦といひその女より男といひます

婦 夫と持たる女と婦といひます

父 我と教へ我と育て我と養ふものと父といひます

母 我と産み我と愛し我と育てらるものと母といひます

子 夫婦の中み生るるものと子といひます

孫 子の子と孫といひます

兄 父母と同くうへに已より先へ生きたる男と兄といひます

弟 父母と同くうへに已より後へ生きたる男と弟といひます

伯父 我父の兄弟と云ふて伯父といひます

伯母 我父の姉妹と伯母といひます

叔父 我母の兄や弟と総て叔父といひまはる

舅 夫や妻の父と舅といひまはる

甥 我兄弟の男の子と甥といひまはる

農 田畑を耕起するものとして總て農といひまはる

商 諸物の賣買をさるものと商人といひまはる

高祖母 祖母の母と高祖母といひまはる

祖母 父母の母と祖母といひまはる

妹 父母と同居する我が後よ産れる女と妹といひまはる

叔母 我母の妹や妹とすたる叔母といひまはる

姑 夫や妻の母と姑といひまはる

姪 我兄弟の女の子と姪といひまはる

工 家や造り或は橋梁を架する等の職人を工といひまはる

高祖父 祖父の父と高祖父といひまはる

祖父 父母の父と祖父といひまはる

姉 父母と同居する我が先よ生れる女と姉といひまはる

曾孫 孫の子と曾孫といひまはる

玄孫 曾孫の子と玄孫といひまはる

妾 年限と定めて子孫を繁殖せしむる為の雇ふものと妾といひまはる

兒童 三四より十五六迄の男と兒童といひまはる

僕 年限と極め雇ひて使役する男と僕といひまはる

弟子 手習學問其外色々のことと師ふかざる學び習ふものと總て弟子といひまはる

歩兵 歩行する小銃と携帶し隊を率へる戦場へ向ふものと歩兵といひまはる

巡查 昼夜市街を巡行して人民の安全を助る人と巡查といひまはる

妻 一生寢食とよりか家事を任するものと妻といひまはる

臣 君よ奉仕する所のものと總て臣といひまはる

婢 年限と極め雇ひて使役する女と婢といひまはる

師 手習ひ學問とより諸事を教ふる人と師といひまはる

騎兵 馬を乗り銃と携へ隊列を正し戦場へ向ふものと騎兵といひまはる

醫 人の病氣を診察して快復を助るものと醫者といひまはる

養子 人の子と取りひて我が家督を譲らんとするものと養子といひまはる

身體 總て五体中よ關する所のものを身體といひまはる

頭 面の上下より後へゆく毛髪の生たる所と頭
とのひまをいふ

口 食物を喰たり声を出しつゝする為の面よ
り穴をいふ

耳 左右ニツラつて専ら音声を聞くこと
を掌る所のをいふ

眉 左右の眼の上より生てつゝる毛をいふ

髪 頭部より生る総ての毛と髪をいふ

腹 五臓六腑をいふ所と腹とのひまをいふ

手 左右よりつて我を思ふ通りふ動くもの
をいふ

指 物を取り或は捨て或はつかう或は摘むこと
を掌る所のをいふ

面 鼻目口のらる部分と云ひまをいふ

鼻 面の中央よりて専ら鼻をいふことと掌る所の
をいふ

目 左右ニツラつて専ら視ることを掌る所の
をいふ

舌 食物を卷制し又物の味を別ち又鼻より同く
声節を程詰くする所のをいふ

髭 口の上下より腮の辺へ生る毛と髭をいふ

背 腹の後と背とのひまをいふ

足 行走し或は躍り或は蹴ることを掌る所の
をいふ

爪 筋の餘りりて諸指の尖端より甲と
爪とのひまをいふ

腰 人体の中部より背の下の方と腰とのひまをいふ

腕 手頭の下の方と肘の辺と腕とのひまをいふ

腿 左右の足の尤も上部の内面の肉の多き所を
いふ

唇 口の廻りよりつて歯を覆ひ物を食ふこと
を掌る所のをいふ

牙 口中の歯より並びて食物を噛砕くものをいふ

領 頭と背中の間の細き所を即ち喉の後
ろふ當る所をいふ

乳 乳の男女とも胸の左右よりつて

掌 手頭の外面と手の甲と云ひ又内面を掌と
いふ

肩 左右の手の番の目の辺と肩とのひまをいふ

臂 手の曲る所の外面をいふ

膝 足の曲り目の外よりつて膝をいふ

齒 口中の上下より生て白く堅きものをいふ

眼 歯と生る所の筋肉と眼とのひまをいふ

喉 喉の腮の下よりて領の前の所をいふ又其中より
食物の通る所と呼吸の出る所の穴をいふ

臍 胎衣を切ると跡の所を臍と云ひまをいふ

踵 踵の足の後部の端の皮の厚き所をいふ

肋 胸の下の所へ左右より集り並び居る骨肋をいひま

心 肋の中よりつく血を造り送り出せるものをいひま

脾 肋の下の左の方にあるもの、總て食物を消化する為は腸へ送る水を拵へるものをいひま

腎 腸より背骨の下腰の方より小便を拵へるの器械をいひま

腸 十二指腸と通て大便と通る働をいひま

衣服

ハ體の温度を保つ為

衿 衿ハ衣服の上の方へつ前より交る様よ仕立風寒と凌ぐものをいひま

裾 裾ハ衣服の下端をいひま

胸 肋骨の上部と總て胸をいひま

肺 肋骨の中よりつく空氣をまひ或は吐くこと掌をいひま

肝 肋の下の右の方にある脾膽及び脾等と共に同一働きをいひま

膽 肋の下より肝へつて胆汁を交る黄ハ水道具をいひま

胃 肋の下の真中にある食物を消化する

袖 袖ハ衣服の左右よりつく手を覆ふものをいひま

直垂 ハ練縮と以て仕立組糸と附く前て結ぶものをいひま

帯 帯ハ織物よ仕立體の中部に於て衣服を圍着せるものをいひま

給 ハ綿と入れあへ衣類をいひま又都々表へ裏と附くものを給といひま

枕 ハ相又他の木よ造り其上へ切れを以て造りたる小枕とのを寝る時天頭の臺をいひま

笠 ハ竹よ其形を造り竹の皮と夾み雨の降る時冠をいひま

草鞋 葉と打ち造り足に敷き付けるものをいひま

履 皮よ造り足に履くものをいひま

烏帽子 ハ紙と折て造り其形ハ官位の華嚴よ依る色々をいひま

蒲團 縮木綿又縮細よ仕立中人綿を多く入して寝る時下敷をいひま

袴 夏ハ単よ冬ハ裏をつけ共いひま取く仕立帯の所を紐とよるものをいひま

蓆 麻又ハ綿よ仕立暑さの時分よ着るものをいひま

蚊帳 萌黄色の目の粗き麻を四角に仕立家の内よ釣く蚊を防ぐものをいひま

簾 ハ茅と柔よ打ち是を編て造り雨と御ぐ為よ着るものをいひま

傘 ハ竹よ造り其上ハ紙と張り葎の油と引る雨天の時よ用ゆるものをいひま

冠 ハ官位よ表をいひ天頭よ冠るものをいひま

夜着 ハ縮木綿又縮細等よ仕立夜を寝る時よ用ゆるものをいひま

羽織 ハ羅紗木綿縮きよ短く仕立衣類の上へ着て前と紐と止るものをいひま

半天 其文羽織より短く又領は外へ返らざ
職人もの上着目印とまきものなり

莫大小 木綿糸を以て編み手へまて寒く凌
ぐものでなり

手拭 木綿の切れを以て手で拭く又ハ身体を洗ひ
清むる時よ用ふるものなり

草履 ハ葉又ハ竹の皮を造り鼻緒をまき
足よまくものなり

下駄 ハ桐の葉を造り之を板の堅末を板に
両中の往來の助とまきものなり

襦袢 ハ木綿縮緬等をして仕立肌へ直し著る
ものなり

浴衣 木綿を單よ仕立浴衣後よ著るもの
なり

布帛

ハ衣服よ用ふる種々の
織物と都て布帛と云ふ

足袋 木綿又絹をして仕立足よまくものなり

釦 ハ銅又ハ金を造り縫て洋服よ附るものなり

頭巾 ハ縮緬縮又ハのちを仕立頭よ冠り
寒きを凌ぐものでなり

雪踏 表ハ畳を造り裏ハ革を附て晴天ハ履
き雨ハ踏むものなり

脚半 木綿をして仕立腰又ハ足首より膝迄の間履
き纏束のものを脚半と云ふ

合羽 ハ羅紗兵部又ハ木綿をして仕立雨よ濡れ
ざる為よ上著るものなり

木履 桐の木を裏を穿ち歯とあり上面ハ
鼻緒をまき足よ履く物なり

絹 繭の糸を以て織くものなり

花布 金巾へ色々の模様を染めぬものなり
花布と云ふ

縮緬 ハ糸を紡ぎ織緬をわたり伸ぶものなり

紗 ハ絹よ似れども其織目粗く薄いものなり

羅紗 羊の毛を用ひて厚く織りたるものなり

綸子 紗綾ふ似て厚く地文縮妻の如く花を
織出したるものなり

縹子 ハ地厚く滑く光澤のつるものなり

錦 ハ五色の糸を以て文章を織り出たるものなり

布 絹や木綿を以て織くものなり

木綿 綿を製する糸を織くものなり

絹 ハ織目粗く織のゆるるものなり

天鵝絨 ハ横は鉄線を通りて織りたるものなり

金巾 唐糸の細きを以て織り地合早ゆて薄く
巾の廣きものなり

緞子 ハ大緞子小緞子の二通り其地合厚く
し美し織文のつるものなり

縹珍 緞子よ似て糸の粘り少く赤黄を以て交
ぜて模様を織出したるものなり

金襴 ハ金線五彩の糸を以て織くものなり

紗綾 地合と指妻の如く又菱織の中うふ織りたるものをいひます

繭紬 ハ紬の類ゆへ煤竹色のものをいひます

上布 縮の一段上品なるものを薩州より出づるものをいひます

唐棧 唐糸を以て色々の縞と織りたるものをいひます

縮 紵と績と紡て縞又カスリに織りし惟子に仕立と着るものをいひます

改機 其地合羽二重より又平ゆへ薄く重よ西洋傘と張るものをいひます

飲食

ハ日用に用うる飯汁菓子酒等と総て飲食と云ふ

飯 米よ水を入て炊たるものを飯といひます

酒 米を蒸し麹を入れて造る又麦を蒸し麹を入れて造る多飲め色々の害とあるものをいひます

餅 餅米を蒸し臼杵を用ひて搗きたるものを餅といひます

酎 ハ米を蒸し是を冷し又米を蒸し加へて造るものをいひます

鹽 ハ海水を汲みこれと煎じて食用となすものをいひます

砂糖 甘蔗の莖の甘き汁を採り煎じて製するものと砂糖といひます

將油 ハ大豆よ麥麴と塩とを合攪して用ゆるものをいひます

味噌 ハ大豆と煮て是を塩と麹と交へて造るものをいひます

粥 米よ水と合し飯よりややく煮上げ物で作ります

汁 味噌と摺り水と交せ其中へ諸物と入れ食用よするものをいひます

湯 ハ水と火よかけ温度と與へるものをいひます

油 ハ魚類又草木の實と搾てよりまた是ハ水より輕いものをいひます

味淋酒 餅米を蒸し是を麹と加造るものをいひます

焼酎 ハ酒又ハ酒滓と蒸溜器よかけ取るものをいひます

團子 米の粉と練りて団形くまをいひます

麴包 ハ麥粉と水とを煉り醱母と交せ団めを籠めて焼ます

麴 米と蒸し麹と入し篠の葉よ灰汁とを攪和し密室へ入して置くと麴よあります

煙草 烟草の葉とを乾燥し刻み煙管よつめ火を付て其煙と吸ふものをいひます

饅頭 麥粉を酵母で発酵させた塊を捏ねて皮をこねて丸くし、油で揚げたもの。蒸すものもある。

羊羹 羊の血を練りこんで加へて型に入ると、拵へる。

器財 日用の道具より農具、武器、戯具、大工、左官の用する道具等と都て云ふなり。

紙 櫛の木の皮を取り製するもの。西洋の紙は、又西洋の草葉や古切れで製するもの。

墨 油煙と膠と練りこんだ香餅を、灰に入し型へて拵へる。

筆 鹿や狸や兎の毛を結んで穂とし、木や竹の軸をつけて文字を書き寫するもの。

硯 石を穿ちて造り、墨を盛る為のもの。石を穿ちて造り、墨を盛る為のもの。

書 紙に折る之を表紙とて綴り、中へ色々の紙記しをいれり。

畫 人物、草花、鳥獸などを紙や絹地に寫し、取らるもの。

算盤 木の匣で造り、一行六十の玉をいれ、並べて算用するもの。

曆 一年中の日没、日出の刻限、夕の引等、記しを本に記す。

印 黄楊又は水牛の皮を造り、姓名等の下へ押す。後の證據とするもの。

机 其形種々あれど、何れも木を造り、書とて字を書き、用かき、拵り。

升 木を造り、縁へ鉄の薄板を打ち、又筋違鉄の棒をいれ、米や油や酒を計るもの。

衡 木の柱の理、同一のつて、鐘を以て物を比較し、其輕重を計るもの。

尺 竹を造り、曲尺と鯨尺とあり。鯨尺は八寸の曲尺の一尺なり。

貨幣 通用の金銀と貨幣と申す。

札 金銀の證とする為、種々の模様を印し、紙で拵る。

錢 種々あれど、其形丸く、中には四角あり、穴を穿ち物と入れり。

碁盤 八角の木の四角を切り、四本の足をつけ、上へ三百六十の目をつけ、黒白の石を置いて勝敗を拵る。

雙六 其形碁盤と大に違ひ、横長の木を造り、黒の駒を用いて勝敗を決する。

將碁 其形碁盤の通り、其目より又目の數は八十二あり、駒は四十あり、駒を用いて勝敗を決する。

鎗 鋼鐵を穂と造り、木の丸く長き柄をつけて、武器と拵る。

刀 鋼を似て片刃あるもの、士の帶に拵る。

旗 其形種々あり、何れも目標とするもの。

大砲 青銅を造り、海岸に備へ、又軍艦に居て専ら非常に防衛するもの。

小銃 鉄を筒と造り、木の基を造り、弾を填て、敵を防ぎ、或は鳥獸を撃つ武器。

喇叭 真鍮を造り、兵隊を進退させる為、吹くもの。

鞍 木を造り、馬の背に置きて其上へ乗るもの。西洋の鞍は革を造る。

燈 鐵と木を造り、馬に乗る時、足で拵るもの。西洋の燈は、鉄のついで、手輕く作り、拵る。

手綱 木綿又は革を造り、左の端を轡へ、附て馬を自在にするもの。

鞭 ハ鯨の骨又ハ竹の根又ハ竹と数本をあはせ造りて牛馬を鞭ち又ハ馬を以て物に差かち示しと教るものなり

蒸氣船 ハ蒸氣の力にて風を構へて進退を自由とする船なり

帆 ハ帆布より一種丈夫の布を造りて之を風を請て船を走らせものなり

楫 ハ木より造り船の後方へ附く船を自在に左右する器械なり

櫓 ハ木より造り船の後方へ力にて船を進ませる器械なり

鋤 ハ其形鐵より同く只鐵ハ其柄を曲げ鋤直柄を嵌り深き穴を穿つ為の用なり

鎌 ハ鐵より造り其形ハ刀を曲て柄を嵌り如き物にて麥草等を刈取るものなり

鋸 ハ薄き鐵板を曲て木の柄を嵌り木材を切る道具なり

舟 ハ木と多く集り造り水に浮く諸物の運送と専ら掌るものなり

軍艦 ハ龍骨より長き木を基礎とし丈夫に造り大砲等を備たる軍船なり

碇 ハ鐵より造り船と海中に安全に止るの器械なり

棹 ハ丸木又丸竹を以て重し船の出入を助け又浅き所ゆくハ之を以て船を進ませる物なり

車 ハ木又ハ鐵より造り諸物を運送する道具なり

鋤 ハ鐵より造り甲へ嵌り木の柄を以て田畑を鋤くものなり

碓 ハ石又ハ土より造り形より重きを轉回し米麥等を挽くものなり

鑿 ハ鐵より造り木の柄を嵌り木材へ穴を穿つ為の用なり

鋏 ハ鋼鉄より造り曲りたる木の柄を嵌り木を研る為の用なり

錐 ハ鋼鉄より造り三角或ハ四角より造り木の柄を嵌り釘を打つ等の用なり

機 ハ木より造り布を織る道具なり

針 ハ鐵より造り糸を通りて衣類其外物の縫ふに用いものなり

網 ハ麻糸より造り魚を捕るものなり

疊 ハ葉を編みたる物で床を敷くものなり

屏風 ハ其形襖を三枚又ハ五枚を以て造りて物より同く共風を防ぐものなり

俎 ハ木の板を二枚の足をつけ諸物を切るものなり

鉋 ハ鐵より造り櫛木の莖へ嵌り木を削る為の用なり

釘 ハ鐵より造り釘を打つものなり

絲 ハ繭又ハ麻綿等を製し反物を織り又ハ衣類等に仕立るものなり

絲車 ハ木より造り一方へ竹車より一方へ紡ぎ出すものなり

釣 ハ其形鐵針を曲たる如く是は針と云ふ魚を釣るものなり

椅子 ハ木より造り腰をかけるものなり

庖丁 ハ鐵より造り木の柄を嵌り魚類及び野菜等を切るものなり

鍋 ハ鑄鐵銅或ハ青銅より造り食物等を煮るものなり

耳言言角 二小才目非才

釜 鉄又青銅より造り飯を炊き又湯を沸かす用なり

膳 木より造り漆を以て作り食事の時の臺となるなり

箸 細き木又象牙等より造り食事を助るものなり

鉢 土より造り外面へ草花人物等を描き其上へ薬を置く焼き食物等を入る皿より深きものなり

瓶 土を焼きて造り水又其外の物を入るものなり

杵 丸き木へ丸き柄を嵌め臼の中の物を舂くものなり

鉚子 銀又鉄より造り酒を入るものなり

鏡 青銅より造り上へ水銀を塗りて容顏を写し見るものなり西洋へ硝子板の裏へ水銀を塗りて用るものなり

竈 木を櫃と造り其上へ火を築き釜を以て飯を炊き物を煮るものなり

椀 木より漆を塗り飯汁等を盛るものなり

皿 土より造り上へ茶を以て焼き食物等を盛る平なるものなり

桶 木を並く円く造り箍より流動物を入るものなり

白 丸き木の中心より穴を穿ち此中へ物を入れ杵を以て舂くものなり

盃 木より漆を塗り其中へ花鳥等を描き酒を呑むものなり

杖 木又竹より造り老人或は盲人の往来を助るものなり

劔 其形刀に似て反る刃あり且両刃ありものなり

弓 竹と木とを合せ造り弦を以て矢を射るものなり

琴 桐の木を中へ空ふ造りこれより十三筋の糸を張る柱とたて弾き樂器なり

笙 木の管を造りこれより十二本の竹管を以て口へ挿し吹くものなり

琵琶 其形杓子に似て轉手曲り四本の糸を以て撥を以て弾くものなり

團扇 細き竹の半分を柄と半分を割て糸を以て編み上へ紙を張り風を招き蚊を驅るものなり

提灯 其形は色々なり何れも中心へ蠟燭を建て夜分の来往を助けものなり

蠟燭 燈心より真で造りあまの蜜とひた火を燃らすものなり

炭 諸木を切り石又土の竈に入ると焼たるものなり

矢 細き丸竹へ鳥の羽を以て又其尾へ鉄を嵌め射るものなり

笛 丸き竹へ穴を穿ち七つの穴を両手の指より押へて調子を取り上の穴より吹くものなり

大鼓 木より皮を張る撥を以て打ち鳴るものなり

扇 竹を薄く削ぎ骨を以て上より紙を以て編み風を招き蚊を驅るものなり

行燈 柱より紙を張り中心へ火を点し夜と昼の如くあかりを以て用るものなり

燭臺 木或は金より造り蠟燭を建てるものなり

薪 諸木を切て竈に焚くものと薪といひます

剪刀 鉄を以て小刀を二本合せたる様で造り刃と刃と合せ物を切るものなり

髮刺

ハ鋼鉄より造り毛髪を刺るもの也

鑢

鋼鉄より造り目と刻と鋸の齒と削り又金属より造り目と刻と削り又金属より造り目と刻と削り

轆轤

短き柱と建横木と設け草を以て此横木と轉下轆や錫の皿等と造り目と刻と削り

釣瓶

ハ桶又ハ箱に竹とつげ又ハ繩とつげを井戸の水を吸むものなり

手桶

ハ木と合せて造り箱と敷り水と汲むものなり

櫃

ハ長持の類にて其形小く下より引出しつゝその櫃といひます

箱

ハ木と以て四用或ハ横長く造りたる物の總名ハ諸物と仕舞置く為のものなり

蓆

藁と編たつものなり

鏝

ハ鉄より作り木の柄とつげ壁を塗り又ハ土を掘る為のものなり

吹革

ハ木より造り中ハ狸の毛を張りたる木と金と進退して風を取らるものなり

燧石

此石を鉄より摩擦して火を取ります

盥

ハ木と固く並べ箱と敷り顔手足又ハ衣類等を洗ふものなり

柄杓

ハ木と削り又ハ曲物と柄とつげ流動物と汲むものなり

葛籠

ハ竹と編み上紙と張り漆等と引く衣類を入るものなり

簾

ハ竹と削りて糸と編み門口等へ下るものなり

囊

布又ハ紙より造り穀物を入るものなり

煙管

ハ銀真鍮又ハ鉄より造り竹のつげを敷り煙草を吸ふものなり

鍵

鉄より造り錠と明らぬものなり

簞笥

ハ重し桐の木より造り引出しつげ衣類其他の物と入れ置く為のものなり

笄

鬘甲又ハ象牙より造り婦人の髪を挿解する為のものなり

階子

ハ木より造り三階或ハ高き所へ昇る時を用ふるものなり

箒

ハ栴柁の毛より造り家内を掃除する時を用ふるものなり

竿

竹と切り枝と拂って衣類等を干す用ふるものなり

火筋

真鍮或ハ鉄より造り火を扱ふものなり

錠

鉄より造り其中ハ彈とつげ簞笥長持或ハ衣類等の締りをつけるものなり

長持

ハ重し桐と以て大きき長く造り夜具希圖等を入るものなり

櫛

ハ黄楊又ハ唐木より造り髪を束る時を用ふるものなり

簪

ハ重し銀より造り婦人の髪を挿すものなり

衝立

其形襖の如くやう太き縁を打ち下ハ壁とつげ下間の中の隔を用ふる物と衝立といひます

箕

楮の皮と割りて竹と削りて編み穀物の塵と簸るものなり

火鉢

ハ木又ハ青銅より造り火を貯へ寒を防ぎ物と焙るものなり

鐵瓶

ハ鉄と鑄り造り湯と沸かす用ふるものなり

單言辭解

小松園藏

藥鐘 ハ銅又ハ真鍮より造り葉と煎り又ハ湯と沸きそのなりりませ

槽盆 ハ土より造り内面多く線と穿り諸物と槽る為より用ゐるものなりりませ

播木 木と丸く削りて播盆の中のものときき時より用ゐるものなりりませ

蒸露鐘 ハ瀬戸物又ハ鉄より造り諸物と蒸て其蒸露氣を取らるものなりりませ

硝子壘 ハ玻璃と以て造り蒸露物と貯るものなりりませ

磁針 鉄の針の動くと見く方角と知る道具なりりませ

時計 ハ時と計る器械なりりませ又金銀等より造りたるもの時計といひませ

晴雨計 水銀の昇り降りと以て風雨と知る器械なりりませ

寒暖計 細き硝子の管の中の水銀の昇り降りと以て寒暖と知る器械なりりませ

望遠鏡 張ぬきの筒の中へ五箇の玻璃鏡ありて造り遠い所と近く見る為の眼鏡なりりませ

電信機 エンキカと以て遠い所へ直音信を通ずるものなりりませ

機關 蒸気車及び蒸気船時計等の仕掛と都て機關といひませ

繩 ハ葉又ハ麻とよめてのひ色々の用でませそのなりりませ

紐 布より仕立又糸と組む物と結び又解くものと紐といひませ

蹴鞠 ハ革より造り足の靴とよませるものなりりませ蹴揚て遊ぶものなりりませ

楊弓 木より小き弓と造り矢と以て射る戲具なりりませ

煙火 竹や葎煙硝と金とこれより火と点て小兒の眼と喜ばせりものなりりませ

木偶 木や土より人の形と造りたる小兒の戲弄物と人形といひませ

紙鳥 紙の字や画より竹の骨と造り風のまよふ高く揚る小兒の戲弄物なりりませ

獨樂 木より造り中心へ鉄線とよませ軸と糸と以て廻る小兒の戲弄物なりりませ

風呂敷 ハ花布或ハ木綿と以て物を包む為の切なりりませ

壺 ハ土と焼て造り或ハ砂糖まよと入ませ貯へ置くものなりりませ

金石 金銀銅鉄及び水晶馬瑙等の礦物とよませる

金 ハ土や他物と一塊よりして礦山の中より出又諸金の中より尤も貴き物なりりませ

銀 ハ金より次々金属とよまれ礦山より振出たものなりりませ

銅 ハ硫黄と一河より塊と土中より赤い色の金より出ませ

鐵 ハ日用欠くべからざる物とよまれ礦山より振出たものなりりませ

鉛 ハ山谷の間より多くなりりませ

錫 ハ鉛より似て堅く茶壺及び皿等より造るものなりりませ

玉 ハ馬瑙其外石の美しもの總名と其種類ハ澤山なりりませ

馬瑙 ハ石より玉より一種の物より黒白紅の三種なりりませ

水晶 透明にして五角六角の稜なり山中より掘出たものなり

琥珀 琥珀の形は龜の如く海洋の深き所に居て此甲を取て算などをして造りたる

水銀 其色銀に似て白く其質軽く天氣の平熱に因り好く流動するものなり

金銀箔 金や銀を紙の如く薄く延べたるものなり

赤銅 銅と金と混合され赤銅よりなるものなり

青銅 銅と錫と入りたる青銅よりなるものなり

穀菜 穀菽豆萆草等の野菜を云ふなり

粳 一稱の實より十月十月頃取て食用するものなり又世界三分の二は此を食用するものなり

糯 其形粳に似て田く色白く餅強飯及び酒造るものなり

琥珀 石砂の多き地より掘出た黄色なる樹脂の塊なり

眞珠 魚の腹より取て赤と白とのものなり是誠しく少く浅淵より多く出たり

石炭 山中より掘出して蒸気船や蒸気車に動力を為すものなり

眞鍮 銅と亜鉛と雜會れ出たるものなり

滅金 金と水と溶解し之を用水を銅と金とを付るに滅金といひます

磁石 鉄と能く引く其力平均なるものなり

粟 其性粘りと餅粟らに餅を製し粘りたるものなり

稗 其形黍粟と同一く田舎より飯を炊き粉を挽て食用するものなり

小麥 秋種で冬長し春秀で夏実る粉と色を造りて食用するものなり

大豆 夏種と冬種あり白と黒と開き莢の中実を結ぶ者又造りて食用するものなり

豌豆 苗葉の如く四五頃頃咲き薄紫色莢の中実を結ぶ者又炒りて食用するものなり

大根 四月種と七月種あり食用するものなり

芋 四月頃種芋と七月頃種芋あり食用するものなり

茄 細く作る蒴菜より夏より秋に至るまで藤色の花を開き実を結び食用するものなり

黍 四五頃頃時て九月末に刈り取り焚き又餅を搗き

大麥 其実小麥より大く皮薄く煮れば甚滑く食用するものなり

蕎麥 二年草なり其実三種あり十月頃迄に刈り取り粉を挽て食用するものなり

小豆 枝葉赤く隱元豆と同一く秋に至り花を開き莢の中実を結ぶ者又造りて食用するものなり

芥 九月頃種と下り四青黄多し花咲き実を結ぶ之を取り粉を食用するものなり

葱 萆草より細く作り葉を取て食用するものなり

瓜 黄瓜白瓜等の總名なり

麻子 小鳥の飼ひ又油と搾り油粕とかく為るものなり

胡麻 ハ黑白の二色あり又其莖ハ四角ゆへ秋
自花と開き節々小實を結びます

蠶豆 其莢常は上に向く故に名を炒り煮
たりと食用する

罌粟 秋種をば冬に至る生ず其葉ハ嫩く
食用よりまた其莢ハ甚だ細く
白くも食用する

胡蘿蔔 其形衣似て細く其色赤く味甘
く食用する葷草なり

芥 濕りたる地を生ずる身は乾きたる地を生ずる
もの共食用する葷草なり

蕨 四五月頃より山の間より生ずる柔滑菜
食用するものなり

欵冬 ハ氷雪を忍ぶ葉ハ荷の如く其莖四五月
頃より食用するものなり

蓮根 池沼等の泥深き所に生ずる紅白花咲く
又根ハ長く路の中心に六七の穴を食
用する水菜なり

紫蘇 四五月頃種を下し其葉紫と綴り
其實ハ塩漬く食用するものなり

白瓜 四月頃種を畑に下し秋にかりて瓜と結
び塩漬く食用するものなり

海苔 ハ海中の苔より是を取らるる海岸へ木
の枝と建て取り漉して食用するものなり

菌 ハ松茸初茸茸茸類茸茸茸茸の総名
でゆりまた又總て朽木及び老樹の根など
きのこ類生ずるものなり

菓類 五菓ハ更なり山味水菓の
類等ハ皆此部を収む

梅 ハ衆木ハ先立花咲き其實酸く又塩漬
け紫蘇の葉を加へて食用するものなり

李 ハ春花咲き夏賣り其味酸く甘いものなり

栗 五六月頃胡桃の如き花を開き其莢ハ多
皮を剥き十月頃霜降れば熟し皮を破り落
ちて味のみを食するものなり

蜀黍 形ハ蘆似て穂赤く其實ハ食用する
穂ハ葉と造り又ハ蓆と織るものなり

綠豆 其實ハ小豆より小く色赤く薄く
粉多き故に餡と製するものなり

大角豆 形ハ小豆より大きく強飯を食
するものなり

蕪菁 如く作る葷草ゆへ根も葉もこの小
食用するものなり

牛蒡 四五月頃畑に作り根と食用するもの
なり

筍 ハ竹藪に生ずる其短き時より取らば嫩く
食用するものなり

藜 ハ濕草ゆへ其味辛く船刺身を煮て
食用するものなり

蒟蒻 春苗を下し六月頃地より移し其根と取
り汁を製し食用するものなり

黃瓜 ハ蔓草ゆへ畑に作り四五月頃食用
するものなり

山葵 山中の水の近き間生ずる又人家を
植其根と食用する葷草なり

昆布 東海中の石に附て生ずるものなり食用す
るものなり

咖啡 ハ西州に生ずる芭木の實より其形
櫻の實の如く之を取らば皮を去り焙り碾
き飲料するものなり

桃 夏桃秋桃色々ありその中ハ秋桃
善き味なり

梨 ハ三月頃白く花を開き其實ハ水気多く
甘き山菓なり

柿 ハ色々らば其實青き時ハ渋く熟すれば
赤くなり甘き山菓なり又熟しても渋き
ものを皮を去りて食するものなり

柚子 枝は刺りて其花の果は白く高く熟すれば黄色く多し畧蜜柑に同じれども其味は酸き山草なり

枇杷 葉の形鬼の耳の如く冬泊き花は咲き春実を結ぶ其肉は薄く枝の太き山草なり

林檎 木はあり其味酸く渋いものなり

葡萄 春花をもち其実秋寒熟すれば紫色の多し水気多く酸く甘きものなり

胡桃 其花を栗の花の如く其実秋寒至りて熟し青桃の如く皮肉を去り核を取て食用する

山椒 三月頃白き花咲き六月頃紅葉の間一実を結び其香の餘きものをとり

草木 芳草濕草及び蔓草の類又香水の類ハ總て此部に入る

菊 五六月頃根から種を九月頃花を開き人の愛するものなり又黄菊食用するものあり

桐 春花咲て後葉を生きたる木を琴又ハ篋管長持等と造り

密柑 此木は枝は刺りて其実冬に至れば黄赤を帯い色の中は辨り辨の中は粒の多し其味は酸く甘き山草なり

銀杏 木は多し霜に遇て熱いと取て肉を去り核を食用する

棗 六月頃花をもち其実初めは青く熟せば赤く食用する又葉は多し

石榴 其実赤くして黒き斑点あり皮の中は蜂の巢の如く黄味あり之を隔て中子人の齒の如く其色薄赤く其味酸く甘きものなり

椎子 其形ハ筆の頭の如く仁白く甘く炒り食用する

慈姑 沼をどの泥深き所に生る水菓にして其根塊を食用する

櫻 其花八重なり一重なりて實は百花の長なり

松 氷雪を恐れず四季其葉緑の色を一目出度木なり

杉 其性真直し延るものなり人家は植て垣根と又山中ふらり

柳 枝弱くして下へ垂れ春の始に花を持ち赤く至れば葉を生きたる木なり

桑 畑を造る灌木を葉を取て蠶を養ひ又茶の代りとする

楮 灌木なり四五頃花咲き白き穂とみそその皮を剥て紙を製する

漆樹 幹を木の如く葉は楮の中より香水を漆と取る木なり

茶 野生なり種生なりその小民生日用の資なりある味葉なり

牡丹 春に至りて大なる花を開き其色種々なり群花中の第一なり人の愛する芳草なり

芍薬 秋の末に葉を出し春に至りて牡丹に似る紅白の花を開き其根は藥に用ゆる芳草なり

海棠 山草なり春の始に紅の花を開き其實は梨の如く種は次々美し花なり

竹 竹の類の一なり其種類尤多く又皮葉を竹の用とする

檜 香水中の尤も良き材なり水に強く諸用する

柏 檜の類の一なり其葉大きく又此葉を取て餅を色にする

藤 五六月頃紫色の叢集て房をさし下へ垂る美し蔓草なり

籐 黄白色なり太き箭竹の如く細く割ると白肉を削り椅子の腰をかけるもの其外色々ありと編て蓆にする

葛 ハ野生の家生の其蔓ハ紫色より長く取
り布を織る又其根ハ製ハ葛粉とす

芒 ハ其形茅の如く秋に至り長き莖と抽んで蘆
葦花の如く穂を生ずるものなり

黄楊 山野人家より多く四時潤き花咲き実色
其性堅くして印形を彫る木なり

朝顔 ハ六月頃より多し早天の種々の色の花を開
く蔓草なり

水仙 山草なり寒中より白き花の咲くものなり

躑躅 ハ其種類多く四五月頃赤き花の澤山よ
咲く毒草なり

棕櫚 其葉ハ扇を閉じ如く蠅打を造り幹ハ生
ずる毛を取て簾を編みたり

茜 ハ冬苗を生一秋に至り花咲き実ハ結ぶ蔓草
根を取て絳と染ま

桔梗 ハ春苗を生一秋に至り紫色の花の
咲く山草なり

芭蕉 ハ濕草なり木ノ如く葉大きく三年
ゆき花咲く其本ハ五節位なり形ハ蓮
花に似たり

蕃椒 人の作るものより春芽を生下り白き花
を開き秋に至り其実熟すれば赤く
その味ハ辛くなり

枝 幹より横に出たるものと枝との名

荅 芽がやわらかく開くものと荅との名

藍 花の中心よりもの藍とりの名

鳥獸 山林禽の類及び獸畜
の類を總て此部ニ集む

鶴 ハ形ち白鳥より大く足首長く洲渚に遊林木に棲
む夜半に鳴き水辺に餌を求め鳥なり

單語彙

菖蒲 四時青き水草なり春に至り其芽と
黄色の花の咲くものなり

萩 ハ八月頃紅又ハ白き花を開く灌木なり

南天 ハ灌木なり草に似て七月頃白き花を開き
其實熟すれば赤く美しく故庭を
多く植るものなり

葦 ハ葦の成長するもの多し濕地を生じ枝よく
竹に似たり

百合 ハ野生の家生の五六月頃花を開く
葉ハ短き竹の葉の如く其根食用なり

木賊 ハ水近き地は多く生じ冬凋落す毎節
より取て木と磋擦り滑くなり

椿 ハ山茶花に似て花の色赤きものなり
油を取るなり

萍 春に至り池澤などの水面に浮遊し葉の裏に
根を生じ繁殖するものなり

山吹 ハ山間など多く生じ四月頃黄色なる
花の咲く蔓草なり

瞿麥 ハ田野に生じ又人之造る其苗小笹の
如く花の色ハ色々なり

鶯 ハ其形ち鴨の掌の如く木石等ハ纏ふ其声
がうなり

葉 枝の節々に出たるものと葉との名

花 實を孕むものなり

幹 地より上へ真直に生じたるものと幹との名

鷓鴣 羽毛白く雪の如く又頭より長き米のやうな
毛の帯を襟とす水に食する鳥なり

小松園藏

鴉 ハ黒き鳥して人里は多く群と鳴きまがき鳥なり

鷹 ハ蹴暴る鳥なり爪剛く鉄の如く諸鳥を取ら喰ふものなり

雁 ハ大き水鳥也足短く春は至れば寒國へ帰り秋は多れば寒國より来り

燕 ハ毎年四月頃南より来て人家の中を巣とし八月頃に至ると又南へ帰り往く小鳥なり

雉 ハ原禽なり羽毛美しく尾長く趾く地を走り其前より鳴く鳥なり

牛 ハ角有り大き獸なり人力を助け又食用となるものなり

豕 ハ猪なるもの食ふ人家々々畜して畜して食用とするものなり

犬 ハ柔順なる獸なり又よく人を助け其命に従ひ其又夜中の守りなるものなり

鶩 ハ其形も鷹鳥に似て小く人里は多く鶏の雛の他の物と攪り行くものなり

九鳥 ハ其類尤も多し山に棲むもの里に棲むもの共大豆と好んで喰ふものなり

鳧 ハ家鴨に似て小く趾く寒く堪へ群を成し飛声風雨りと疑り水鳥なり

鶏 ハ家毎に飼ふものなり其種類多く趾く鳴く時と告るものなり

馬 ハ疾く馳り車と引車と負ひ人の方を助るものなり

熊 ハ豕に似て大く冬は穴を棲し性軽捷なり高き木の上を猛獸なり

鹿 ハ大く小馬の如く牡角有り夏は至れば山林に棲し田圃に出る穀類を食ひ此は呼声の哀れなるものなり

猫 ハ鼠を防ぐ為し家毎に畜ふ小き獸なり婦女子の愛するものなり

鼠 ハ形も兎に似て耳短く尾も長く長くと身の太し同ト家毎に住むものなり

狐 ハ形も小犬の如く昼は穴を伏し夜出て食を其性狡猾なる獸なり

兎 ハ家兎野兎の二色なり耳長くと前足短くと後足長く趾く飛ぶものなり

鷓鴣 其色黒き水禽なり夜は林に棲し昼は水に没し魚を取ら故に捕ら魚とよくあはれ業とするものなり

梟 眼は猫の如く夜は昼見え夜は飛や寝鳥を取ら食ひ長はれ其母を食ふものなり

鴛鴦 ハ穴を棲し其羽色美しく又雄雌離れ水の中を遊ぶ水鳥なり

鷹 鷹鳥に似て大く力強く鷹鳥を取ら大く力強い又小兒とも取ら食ふものなり

鶩 形も鴨に似て高く飛越え人家を害れ常は泥と好んで食ふものなり

猴 ハ其形も人の如くなり身体毛を生じ趾く歩むものなり

狸 ハ大く孤位なり黒と黄の斑多し趾く鳴くものなり

鶺鴒 ハ鳥に似て水辺に多く常は首尾振揺らぐものなり

鶉 昼は草を伏し夜は至れば群を成し飛び田野に多く食用なり

木兎 眼は猫の如く両耳有り昼は伏し夜は登風を拾ふ山禽なり

鸚鵡 其類多く人音と真似人として笑はるものなり

鴈 ハ大く鳩の如く常は水面に軽くと群れ泳ぐ水鳥なり

蝙蝠 形も鼠に似て黒き薄肉の翅有り夏は冬は穴を伏し夜は飛ぶ山禽なり

鶯 形も目白く似て其色黒く春の始は鳴りて人々愛せらる小鳥なり

雀 人家の軒先を巢と造り一類群飛一穀類と好んで食ふ小鳥なり

雲雀 状も鶯に似て草中棲る麥の熟する頃鳴き高く空より原禽なり

鰻 形も爪も似て毛の色青黒く水中棲る魚と取り食ふ獣なり

狼 形も犬の如く尾を下へ垂れ群行し人々を食ふ故に西洋各國より狩り獲る獣なり

虎 高さ三尺位長さ七尺位毛の色黄く黒く斑有り爪鉤の如く性黒く肉食生物と取り食ふ獣なり

鼯鼠 鼠に似て長く毛の色黄く赤く鳥鼠と取り食ふ獣なり

栗鼠 形も鼠に似て大く尾も毛多く常に土を食ふの如くなり

象 形も鼠に似て大く尾も毛多く常に土を食ふの如くなり

鼯鼠 形も鼠に似て大く尾も毛多く常に土を食ふの如くなり

時鳥 状も雀の如く羽の色黒く口赤く夏は夜啼く止まば其声の哀なり

水鶏 大さ鳩の如く雌雄は似る夜に至れば人の戸を敲くや水辺棲る鳥なり

九斤鶏 形も鶯の如く大く又尾短く脚も毛有り其卵ハ鶏の倍も産む

猪 山中に棲む猛獣なり夜に入ると畑を荒らすなり

貉 形も狸に似て鼻尖り毛多く登山野に伏し夜に出で虫類を食ふ獣なり

羊 湿地と乾燥地と好む常小草を食ふその毛は切て織物とする獣なり

象 形も鼠に似て大く尾も毛多く常に土を食ふの如くなり

鼯鼠 形も鼠に似て大く尾も毛多く常に土を食ふの如くなり

象 形も鼠に似て大く尾も毛多く常に土を食ふの如くなり

象 形も鼠に似て大く尾も毛多く常に土を食ふの如くなり

象 形も鼠に似て大く尾も毛多く常に土を食ふの如くなり

羽 ハ魚の鱗の如く鳥類の身体中を生ずるものと羽と云ひます

尾 ハ鳥類の体の終る所別生ずるものと都て尾と云ひます

角 獸類の頭のよみ生ずる骨と云ひます

蹄 獸類の足の先の固き所と蹄と云ひます

嘴 鳥類の口をさへく嘴と云ひます

翼 鳥の空を翔り飛ぶ為よ左右生ずる羽根と云ひます

鱗 ハ魚の鱗の如く鳥類の身体中を生ずるものと羽と云ひます

鱸 世伊古の長たる魚と云ひます

龜 冬の上中を棲る春夏は出て溪谷に遊び卵を地産む又捕んとする甲の中へ四足首尾を縮むるの如くなり

蝦 ハ海川湖等生ずる足多長く腹の外よりと持つものなり

魚蟲介

河海、江湖の有鱗無鱗魚化卵、濕生の虫類及び介甲、龍蛇の種属ハ此部門中に入る

魚 ハ江海に生ずる魚を其形ハ射に似て扁く潮を離るれ直し赤くある魚なり

鮒 ハ鯉に似て小く河湖に生ずる泥と好む魚なり

蟹 ハ池沢清水の中を生ずる其性躁しく沫を吐き二の殻ハ足の足と以て能く横を往くものなり

蛤 ハ海中に生ずる紫の斑有り其形ハ栗に似る貝と食用に云ひます

蜆 ハ江河より多く生ず其形は蛤に似て色黒く両頭のよよ白く丸る斑の汁み入水食用なり

蜻蛉 ハ本邦の足四ツ薄紗のやうな翼の頭太九月頃多く出で蚊を食ふものなり

蜂 ハ形も木虫に似て黒く尾に針あり誤る時其痛甚し

螢 ハ濕熱の氣を感して化生 腹の下より陰火を放つ虫なり

蛙 ハ胸長き故に能く飛性好んで座沼池等化生 七月の暮まで待つ鳴く虫なり

蛇 ハ種類多く形も鱗鱗は似て長き其色黒く白き斑あり腹を能く行くものなり

鯨 ハ海中第一の大魚なり形も鱗の如く長きと周りと相同じ其長きもの五丈あり

鰻 ハ鱗に似て鱗も尾の疥に並びて重なる刺の如く海魚なり

鰻 ハ二片よく對なく海中の石に附く貝なり

蝶 其類多しれども皆四ツの翅あり性花を好む卵生の虫なり

蟬 ハ蟬蟻の化したるもの薄く美た羽四枚あり六月頃木より止りて鳴く虫なり

蠅 ハ暖き喜ぶ寒を惡む性人を攪く甚しく驅れども来り殺せし生るもの虫なり

蜘蛛 ハ其類多く軒端を巣を造るものなり 諸虫の如く待つ食ふものなり

蠶 ハ桑の葉を食ひて繭を造るもの卵生の虫なり

鰯 ハ鯉に似て身細く頭扁く性好んで泥を喰ふものなり

鰈 ハ身扁く頭小く口尖り脊黒く腹白く両眼上を並びたる海魚なり

生魚 ハ鱗に似て大く其肉赤く味の能きものなり またこれを塩漬しめを塩引なり

鯖 ハ口尖り脊青く斑の魚なり北海西海の辺に多き魚なり

堅魚 ハ鱗に似て大く嘴尖り鱗多く色青黒く光りたる海魚なり又此肉を切り蒸すと松魚節なり

鰻鱺 形も蛇の如き川魚なり背肉の鱗なり春に穴を掘り夏に至ると出づ其味の能きものなり

年魚 ハ海より谷川に多く生ずる小魚なり形も柳の葉の如く生長し其年の内は死す

金魚 其色赤なり紅白交りたるもの美しく尾も赤なり小魚なり

章魚 烏賊に似て大く頭円く八足あり皮多し其色赤なり其味も能きものなり

水母 其色紫なり眼も形も円く上層の下面に物らしき耳の如く又足の如く海中に浮くものなり

黄鰯魚 ハ頭大く口又大く北海より多し性寒を喜ぶ夏に見え塩に干れば長く腐らぬものなり

鰻 似て細き海魚なり

河豚 ハ海に多く形も刺斗の如く背青白く黄く鱗も細く肝及び子も毒なり

鰯 ハ海中に群行し其鱗脱し易し人取ら食ひ又油を取ります

白魚 自昔小魚なり東京品川海に多く冬の未だ至ると鱗火を焚きその集るを待て取らぬものなり

烏賊 ハ形も車輪の如く口の側は本の足あり 一帯の如く雲を遊ばし腹中の墨を吐き却て此墨を取らぬものなり

海鼠 ハ形も蛭に似て大く目口又骨多し 其の如く物に觸ると縮むものなり

蠣 ハ海中の石に附て生ず形も石の如く一房毎に中肉あり食用なり

鼈 ハ水棲と陸生と龜と類と同一を食用とす

紫螺 ハ螺の類にして四角殼と數角の口田くと蓋のつ殻と以て煮て食用とす

蛭 ハ水中に濕生するもの其形は蚯蚓に似て扁く鞋く人馬等の血を吸ふものなり

蚤 ハ色赤く肥たる化生の虫にて蝨と飛ひ入ると吸ふものなり

蚊 ハ晝伏して夜に飛んで人の血を吸ひ煙を恐るものなり

子子 ハ濁り水より化生するもの性好んで腰と聳へて水の上の群れ遊ぶものなり

蛤蚧 ハ蝸牛に似て殼なく二本の角を足とす腹行する濕生虫なり

鱗 魚類の尾より頭の方へ重りたる居るもの鱗といひます

淺刺 色形は共路に似て黒く紫の斑なり又腹中より直珠のつ丸れ尾張真珠と云ひます

蝨 ハ蝗の類にして頭小く羽大きく空月頃昼夜啼く止らざる化生の虫なり

蝸牛 濕地に生ずる虫の形は蚯蚓に似て四つの角のつ又殼を負ふて行き驚くとつれは首尾を殼の中に入れて

蝨 ハ卵生の虫にて二本の足は性静人の血を吸ふものなり

虹蚧 濕虫にて土中棲し雨降れば出で晴れば夜に啼くものなり

螳螂 ハ頭大きく二つの手鎌の如く鋸の齒のつ又足は四本のつと行くと尤も捷く小虫を取食ふ卵生の虫なり

蟻 春出て食を求め冬に土中に蟄し好んで群行する卵生の虫なり

鱗 魚の脊中の上や側へ附てゐる鳥の翅の如きものを鱗といひます

松井惟利 編輯 單語諺解終

版權免許

明治八年十二月十九日再々刻成

編輯藏版人 松井惟利

東京第三區五小區築土幡町廿番地

東京小石川大門町

發行 雁金屋清吉

書林 同神田通新石町 同出店

